

「マクラ」を活用する

2024・5・8 重枝 一郎

授業の冒頭で「めあて」を伝えた途端に生徒のモチベーションが下がってしまうという経験はどの先生方にもあると思う。生徒は「めあて」を聞いて、「どうせわからない」という気持ちで授業が始まってしまえば、その後のわかりやすい説明もスライド等の準備も、もったいない状況に陥ることがある。

人は好き嫌いや興味のあるなしによって、聞こうとする気持ちが大きく変わる。好きなことについては、それが難しくても複雑でも興味をもって聞く。さらにそれは記憶に刻まれる。実際にやってみようという行動にもつながる。一方、嫌いなことについては、聞くこと自体が面倒だし、知ったところで何の役に立つのだろうと思ひ受信しない。従ってほとんど記憶に残らない。

コミュニケーションという観点で見ると、家族や親しい友人であれば、人となりや好き嫌いだけでなく、これから話そうとする内容について、どの程度の基礎知識があるのかよくわかった上で話す。それでもわかってもらえないことが多々ある。

では授業はどうだろう。生徒の人となりや好き嫌いなど関係なく内容を説明するのが授業になる。ほとんどの場合、生徒は大変だ、面倒だと思っているところからスタートする。それを正確に伝えることは並大抵のことではない。ところが私たち教師は、教室という空間で教壇に立つと、生徒に向かってきちんと話せば伝わるのではないかという錯覚に陥ってしまう。教師自身は大抵その教科が好き、または得意だった場合が多い。だからその教科の教師になっているとも言える。ところが、生徒の大半はそうではない。

つまり、人が何かを伝えるという観点で考えたときに、授業という場は、伝える側の教師にとってとても過酷な状況だと言える。だからこそ**授業の導入で、生徒の心のシャッターを閉じさせないようにしなくてはならない。**

落語は通常、いきなり本題に入らず、世間話をしたり、本題と関連する小咄をしたりする。これを「マクラ」と呼ぶそうである。「マクラ」は観客に自然と落語の世界に入ってもらおう役割を果たす。また、わかりにくい言葉をさりげなく説明したり、本題の展開に重要な言葉を説明したりするのも「マクラ」は使われるそうである。

授業に置きかえるとこれは役立つ。「それならとりあえずやってみよう」という気持ちで取り組むのと、「どうせ役に立たない、自分には関係ない」と思って仕方なくやるのとでは主体性に差が出る。そのため「めあて」をすぐに出すのではなく、それに向けた「マクラ」を入れることで、最初の段階で、心のシャッターを閉められないようにしたい。すでに生徒がもっている知識から話を立ち上げ、気づけば「めあて」に対する目的意識が芽生えているという状況にしたい。

私は、「ミッション AL」の学習プロセスでもこのことは重要だと言っている。それは、最初の「目標を共有する」段階のことを指す。ここで、本時の学習の「めあて」を引き出すことを求めている。つまり「マインドセット」のことである。

余談だが、毎年高3の共通テスト翌日の自己採点の時間がある。その時間にテストを受けていない生徒を対象に授業をしてくれと依頼される。高3の先生方の「めあて」は「今後の進路に向けた話」になる。参加生徒は多様な進路であり、この「めあて」はなかなか難しい。それこそ私の話など、生徒にとっては忍耐の時間になりそうである(笑)。昨年度は、グループワークをする中で、一つのフレーズを引き出し、それを説明してみた。心のシャッターを閉じられないよう、少しでもやる気を引き出し、記憶に刻みたいと思った。具体的には「人は、心の寛容な人の中で育てられると、忍耐強くなる」というフレーズについて、科学的根拠や日常に関連付けて話した。